

〈論文翻訳〉

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(*KZfSS*)にみる社会学の歴史 (上)

シュテファン・メビウス
梅村麦生 訳

要旨

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(*Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, *KZfSS*)は創刊以来、ドイツ語圏の社会学専門誌のなかで中心的なものの一つに数え入れられている。*KZfSS*の多くの論文は、ドイツにおける社会学の議論や論争、社会学が経た展開の過程に影響を与えており、専門分野の中心的な議論と社会の発展を反映している。本稿では、主に本特別号に再録された*KZfSS*の諸論文を順に見ていくことで、ドイツにおける社会学の歴史の劃期をなす諸段階に光を当て、さらに社会学的批判の変化について問うこととする。

キーワード

ケルン社会学・社会心理学雑誌、社会学史、ドイツ社会学の歴史、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）の社会学、知識人、社会批判

1 はじめに

『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(*Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, *KZfSS*〔以下、『ケルン雑誌』と記す])は、疑いなくドイツ語圏の社会学をリードする雑誌の一つである（本号〔『ケルン雑誌』69巻1号別冊（＝特別号56巻）〕のラウフトとヴィンターの論文[Rauhut und Winter 2017]を参照）。この雑誌は当初、『ケルン社会科学四季報 シリーズA：社会学篇』(*Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften. Reihe A: Soziologische Hefte*)というタイトルで発行され、ドイツで社会学という旗印をはっきりと掲げた最初の専門誌であり(Stölting 1986: 168)、しか

も今日の『ケルン雑誌』に至るまでここに掲載された論文が最も多くフリッツ・ティッセン社会科学論文賞（Fritz Thyssen-Preis für sozialwissenschaftliche Aufsätze）を授賞している（参照、Dreier 2016: 2）⁽¹⁾。本号収録のハイコー・ラウフトとファビアン・ヴィンターの引用分析が示すように、『ケルン雑誌』は国際的にも国内的にも広く認識されており、ドイツ語圏の社会学の枠内では最も受容されている社会学専門誌の一つである。

『ケルン雑誌』がドイツ語圏の社会学に対してもつ意義について考えるには、この雑誌が続いてきた過去およそ百年を振り返ることが自然であるだろう。したがって本号は、そこから中心的な論文を選び、社会学史的に反省することに紙面を費やしている。再録する論文の選択は、編集発行人チームと学術顧問チームの議論を経て行われた。両チームのメンバーたちは、考慮の対象となる論文が数多くあるなかで、取り上げるに値する論文すべてをこの特別号に収録することはできず、したがって本号がドイツ連邦共和国の社会学全体を代表するものでもない、ということを確認している。

本号が対応しているのは、ここ数年来ドイツ語圏でますます見られるようになった、一連の社会学史的な諸活動である。社会学史的研究と反省への関心の高まりを示すものとして、例えば制度や出版物の水準で言えば、『ツュクロス——社会学理論・社会学史年報』（*Zyklus: Jahrbuch für Theorie und Geschichte der Soziologie*）や『セレンディピティーズ』誌（*Serendipities: Journal for the Sociology and History of the Social Sciences*）⁽²⁾といったディシプリン史に向けた機関誌が新たに刊行されたり、また2016年にオンラインで、そして2017年に紙で出版されたドイツ語圏の社会学史のハンドブック二巻本（Moebius und Ploder 2017）〔その後、2018年に第三巻（年表）が刊行〕や、社会学史研究のさまざまな方法論や根拠づけについて論じている『社会学史——方法とねらい』（Dayé und Moebius 2015）が刊行されている。加えて、しばらく前から世代や国を超えて社会学者たちが集まって定期的に交流するようになった⁽³⁾。ところで、ロタール・

⁽¹⁾『ケルン雑誌』の歴史について、より詳しくは本号所収のフォルカー・ドライアー論文（Dreier [2016] 2017）を参照のこと。本号に再録した最初の論文でレオポルト・フォン・ヴィーゼが引いているように、ドイツ語圏では先行する雑誌がスイスの社会学者アプロテレス・エロイテロプロスとアレクシス・フォン・エンゲルハルト男爵の編集発行で1909年に『社会学月報』（*Monatsschrift für Soziologie*）として刊行されていたが、同誌は1年の刊行で早くも休刊になっている。しかしそれでも同誌の著者には、ルートヴィヒ・グンプロヴィッチ、ロベルト・ミヘルス、フランツ・オッペンハイマー、フェルディナント・テンニース、ルネ・ウォルムス、アルフレート・フィーアカント、レスター・F・ウォード、アキッレ・ローリアといった分野を代表する著名な人びとが名を連ねている（参照、Stölting 1986: 166; Zürcher 2016: 9）。同じく言及すべきものとして、パウル・バルトの『哲学・社会学四季報』（*Vierteljahresschrift für wissenschaftliche Philosophie und Soziologie*）がある（この題は1902年より。参照、Stölting 1986: 165）。

⁽²⁾ <http://serendipities.uni-graz.at/index.php/serendipities>.

⁽³⁾ 念頭に置いているのは例えば、グラーツで毎年開かれている博士号プログラム「社会科学と文化科学の社会学・歴史」の春期講座（<http://doktoratsprogramm-geschichte-soziologie-sozialwissenschaften>）。

ペーター（Peter 2001a: 11, また Moebius 2004, 2016a も参照）にしたがえば、「社会学史（Soziologiegeschichte）」と「社会学の歴史（Geschichte der Soziologie）」は概念上で区分される。「社会学史」は、社会学研究の一つの独自の方向性を意味しており、「社会学の理論形成、研究、制度化の歴史的な現実の道のり」として理解される社会学の歴史に加えて、「社会学と社会との関係に関わる他のあらゆる活動と現象」をも扱うものである（Peter 2001a: 11）。したがって、「社会学の歴史」は社会学史という研究の方向性にとっての研究対象であり（参照、Moebius 2004: 15-16）、社会学史は「社会学とそのアクター、実践形態、学術的成果、制度、そして社会における機能の歴史的な過程」を研究するものである（Peter 2001a: 11）。

社会学史研究には、いくつかの理由から意義がある（参照、Dayé und Moebius 2015）。一つの理由として、ヴォルフ・レペニース（Lepenies 1981）が『社会学の歴史』シリーズの序で提示したような、専門ディシプリンのアイデンティティを確立するという問題がある。しかしそれだけではない。社会学史が社会学にとって基本的な構成要素であると主張する別の理由は、歴史意識と社会的なものに対する歴史学的な見方とを媒介することや、社会現象が歴史的に状況づけられていることを示すことのうちにある。そうした試みは、さまざまな種類の合理的選択理論やポストモダン的な歴史の終わりの宣告に見られるような、非歴史的（ahistorisch）なアプローチがますます目立つなかで、いよいよ必要とされるようになっていられる（参照、Peter 2001a: 10）。しかし私の考えでは、社会学史的な視点が必要とされるのには、特にあと二つの理由がある。第一の理由は、社会学の諸対象のなかで構造的に課せられている、歴史との関わりである。

意味指定はつねに過去の意味指定や意味構想によってあらかじめ構成されている。しかし、構築と再構築のあいだには時間的な差異があるため、その意味指定と過去の意味指定や意味構想とは原理的に同一ではありえない。そのかぎりでは、社会学はつねに意味指定どうしの——事前の構想と事後の確認との——差異に差し向けられている。この差異を反省的に主題化することが社会学のディシプリンの特徴をなしている。つまり社会学は自身の過去との構造的な関わりによって、構造的に自己主題化が課せられている……。 (Endreß 2001: 65)

uni-graz.at/de/spring-schools）や、2014年から開催されているドイツ語圏の社会学の歴史に関するワークショップ（2014年グラーツ、2015年フランクフルト・アム・マイン、2016年コンスタンツ）である。

第二の理由として、社会学史は社会の観察の反省史として必要とされる。つまり、特にパウル・ノルテ（Nolte 2000: 19 以下, 244 以下）がドイツ語圏の社会学の歴史をまとめるなかで認めているように、「二次の観察」として必要とされる。どのような解釈の型、知覚の型、そして秩序の型によって社会の専門的観察者つまり社会学者による社会の観察は行われてきたのか。社会の諸過程についての社会学者の理解は、何に影響を及ぼし、何を促し、あるいは何を妨げてきたのか。そのことで社会学者はどのような「社会」を構築してきたのか（Nolte 2000: 244）。社会学者たちはどのように互いに争ってきたのか。その際、どの見方がヘゲモニーを握り、そしてどの見方が忘却されるか、少なくとも学術的に顧慮されなくなったのか。科学社会学、知識社会学、文化社会学が示してきたように、学術もまた一つの社会的過程であるとするならば、何より社会学にも同じことが当てはまる。

2 『ケルン社会学四季報』（*Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*）の制度化

本特別号は、『ケルン雑誌』の前身誌である『ケルン社会科学四季報』（*Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften*）に掲載された、レオポルト・フォン・ヴィーゼによる 1921 年の創刊論文から始まっている。この『ケルン四季報』は、第一次世界大戦終結前にコンラート・アデナウアーの主導で設立された社会学の領域での最初の研究所と直接の関わりがある。その研究所とは、1919 年に設立されたケルンの「社会科学研究所」（Forschungsinstitut für Sozialwissenschaften）である（参照、von Alemann 1981: 349; Gorges 1986: 97 以下; Kaesler 1997: 235; Schad 1972: 49 以下 [=1987: 64 以下]）。ケルン市が資金を拠出してこの研究所の課題は、事務局長を務めたクリスティアン・エッカートによれば、社会法、社会経済、社会政策の諸問題を分析することにあつた（von Alemann 1981: 352）。フォン・ヴィーゼが回想のなかで伝えているように、市民に衝撃を与えた 1918 年の 11 月革命の反響（参照、von Wiese 1957: 57; Gorges 1986: 99）を受けて、そしてさらなる「社会革命が差し迫っていること」（von Wiese 1957: 52）から、「社会問題（soziale Frage）」が研究の政策的目標とされた⁽⁴⁾。当時、ラインラントの政党が中

⁽⁴⁾ 1922 年にイェナで開かれた第一次世界大戦後初の社会学会大会は「革命の本質」を主題としていたが、価値判断がきわめて大きくなることを恐れて、アクチュアルな意義に具体的に入り込むことはなかった（参照、Gorges 1986: 87; van Dyk und Lessenich 2008）。ドイツ社会学会の活動再開は特にフェルディナント・テンニースとヴェルナー・ゾンバルトに負っている（参照、Stölting 1986: 198; Dörk 2016）。そしてフォン・ヴィーゼはドイツ社会学会の内部で自身の関係学が重視されるよう宣伝に努めた。テンニースによる 1922 年ドイツ社会学会大会の開会の辞は、『ケルン四季報』のフォン・ヴィーゼの諸論文を踏まえて関係学に社会学の中心的な役割を認めている（参照、Kaesler 2008: 85）。フォン・ヴィーゼは 1922 年の同大会で基調報告も行っており、その主題は「革命の社会学の問題設定」であった。フォン・ヴィーゼ

中央党、社会民主党、自由党に分割されていたことに対応して、この研究所もアデナウアーによる運営のもと社会学部門、社会政策部門、社会法部門に分割され（参照、von Wiese 1957: 52; von Alemann 1981: 349-50; Gorges 1986: 100 以下）、そのうち社会法部門は1928年によりやく設置された。アデナウアーが1918年3月の市議会開催前に述べているように、以上の3部門が分けられるとともに異なる研究方針が、「つまり《キリスト教》の基盤のうえに立つもの、社会主義の基盤のうえに立つもの、そして純粋な資本主義の基盤や企業家の立場に近づくもの」（引用は von Alemann 1981: 351 より）という、それぞれ異なる研究方針が示されるようになった。レオポルト・フォン・ヴィーゼとマックス・シェーラーが社会学部門の長となり（ただし、実質的な共同研究は行われていない）、フーゴー・リンデマンが社会政策部門の長となり、そしてその数年後にテオドル・ブラウアーが社会法部門の長となった⁽⁵⁾。当初の社会学部門の助手は、パウル・ホーニヒスハイム、アニー・オールンベルガー、マリア・ショイが務めていた（参照、Gorges 1986: 101）。また研究所の部門と同様に、『ケルン社会科学四季報』も『シリーズA:社会学篇』（1921）と『シリーズB:社会政策篇』（1922）に分割された。しかし早くも1923年に、レオポルト・フォン・ヴィーゼによって両者は二つの独立した雑誌として、つまり『ケルン社会学四季報』（*Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*）と『ケルン社会政策四季報』（*Kölner sozialpolitische Vierteljahresschrift*）として、1934年に休刊となるまで運営され編集発行されるようになった。そして『ケルン社会学四季報』は1922年の2巻4号からドイツ社会学会（Deutsche Gesellschaft für Soziologie, DGS）の機関誌にもなっている。

ディルク・ケスラー（Kaesler 1997: 235）が強調するように、ケルン社会科学研究所の設立年である1919年は、この年に教授資格をもつ3人の教授が社会学のポストに任用され、新設大学のもとでこの分野の最初の制度化の歩みが告げられたという意味で重要である。フランクフルト・アム・マインではフランツ・オッペンハイマーが最初の社会学講座を開講し（参照、Caspari und Lichtblau 2014）、ケルンではレオポルト・フォン・ヴィーゼが経済国家学〔政治経済学〕講座と社会学講座を、そしてマックス・シェーラーが哲学講座と社会学講座を担うようになった。1920年代初頭から中頃までの他の社会学の中心地は（参照、Lepsius 1981a: 11; Stölting 1986: 105 以下）、ハイデルベルク（アルフレート・

この報告に激しい批判を寄せたのは、カール・グリュンベルクと、特にオーストリア・マルクス主義者のアルフレート・アドラーだけである。アドラーは「ケルン学派の関係学に対する徹底した反対者」であった（Kaesler 2008: 86）。

⁽⁵⁾とはいえ、フォン・アレマン（von Alemann 1981: 367, 373）が伝えているように、社会学部門のなかで大きな経験的研究が行なわれることはなかった。フォン・ヴィーゼを思えば、この部門は第一に『ケルン四季報』の編集局とドイツ社会学会の事務局であった。

ヴェーバー、エーミール・レーデラー）、キール（フェルディナント・テンニース）、ゲッティンゲン（アンドレアス・ヴァルター）、ミュンスター（ヨハン・ブレンゲ）、マールブルク（マックス・ツー・ゾルムス伯）、ライプツィヒ（ハンス・フライヤー）、ベルリン（ヴェルナー・ゾンバルト、アルフレート・フィーアカント、クルト・ブライジヒ、リヒャルト・トゥルンヴァルト、カール・ドゥンクマン）にあった。

先の雑誌の創刊は、レオポルト・フォン・ヴィーゼがヴァイマル共和国の学術界のなかで社会学を制度化し、保護し、尊重されるよう尽力する上で、重要な礎石となった（参照、Kaesler 1997: 240, 242）。本号に再録した創刊論文「ドイツ社会学雑誌の今日の課題」〔von Wiese 1921〕から読み取れるように、フォン・ヴィーゼはそれまでの論戦と方法論争、特に価値判断論争（参照、Albert 2010）を目の当たりにして、上記の目的のためには社会学者たちがみな実りあるかたちで協調する必要があると考えていた（参照、Kaesler 1984: 464; Gorges 1986: 106; Stölting 1986: 169）。この雑誌をもとに「討論と批判を行うことで、すでに長く続いた方法論争から建設的な研究へと移る道を見出すべきである」とフォン・ヴィーゼは記している（von Wiese 1921: 5 [2017: 75]）。初期のドイツ社会学に一般的に見られた（そして今日まで続く）、多くの視点、カオス的な状態、そして政治的な諸傾向が社会学に併存していることに対する嘆きがフォン・ヴィーゼに及んでいたものであり、フォン・ヴィーゼは自ら任じた「仲裁者」の役割（参照、Kaesler 1997: 240）のもとで、「[[より]厳密な客観性」（von Wiese 1921: 6 [2017: 76]）と政治的な中立性を命じていた。

特に、現実には存在しない政治的な中立性を公言することは、ヴァイマル共和国初期のイデオロギー的に加熱した状況にあった学術界において、フォン・ヴィーゼが社会学を制度的に定着させようとするうえでの専門家内政治の中心的な戦略の一つを表していた。そのためフォン・ヴィーゼは、はっきりと社会学を社会政策から分離したいと考えていた。「われわれは理論的な問題だけに限定し、応用的な社会論の問題、芸術論の問題、政治、特に社会政策（しかも社会政策は『ケルン四季報』の別のシリーズとして独立して紙面が割かれている）、そして文化保護事業と福祉事業の問題はすべて、除外するつもりである」（von Wiese 1921: 6 [2017: 76]、強調原文ママ）⁽⁶⁾。

この「境界設定（boundary work）」（[トマス・F・] ギアリン）つまり半学術的との烙印を押された社会政策から社会学を区切ることは、必須なことではなかったであろう。そ

⁽⁶⁾ しかし、ケルン学派の表面上の政治的な中立性は、この界で他のアクターが評価を獲得するという副次効果をももたらした。そう指摘しているのが、エアハルト・シュテルティングである。「『社会化』、新しい中産階級、そしてファシズムと《有機的社会》に至るまで、ヴァイマル時代の中心的な議論は、ヴェーバーらが共同で創刊した『社会科学・社会政策論叢』のなかで扱われ、かくして今日の基準から見て当時のドイツ語圏の機関誌一般のなかで最重要のものとなった」（Stölting 2006: 21）。

のことを示すように、パウル・ノルテはドイツ社会学に関する記述のなかで「というのも、マックス・ヴェーバーがすでに1904年『客観性』論文のこと。引用者メビウス記す』に基本的に明確にしたことによって、社会政策は価値判断論争の内外で確固たる地位を占めうようになったからである」と正しく強調している（Nolte 2000: 137）。しかし、フォン・ヴィーゼによる制度化の算段を、単に社会学がより一般的に尊重されるよう努めるのみならず、まったく特定の種類の社会学が優位になるよう試みる戦略とも見なすならば、差異化はとりわけ必要であった。プロイセン文部省の次官補カール・ハインリッヒ・ベッカーが、たびたび注目され議論的となった1919年の「大学改革についての考え」のなかで社会学に対してドイツ人の普遍科学と再教育科学としての中心的な政治的役割を認定したとき（参照、Nolte 2000: 134; Stölting 2006: 22）、フォン・ヴィーゼは社会学を、統一的な概念体系をもつ「輪郭のはっきりした個別科学」として、より正確に言えば関係学としての社会学という自身の理解のもとで宣伝した（von Wiese 1957: 53）。「これが新たなディシプリンについての彼による境界設定であり、彼にとって重要な部分が保存された」（Stölting 1986: 169）。かくして創刊の序では、この雑誌の各号は社会学という「関係学のアーカイブ」として、相当の部分が「われわれの社会的な認識を真に促すと編集部が約束する」方向に開かれると記していた（von Wiese 1921: 9 [2017: 78]；また von Wiese 1957: 61 も参照）。したがって、制度化と専門化を成功させることは、フォン・ヴィーゼが考える種類の社会学つまり関係学によってのみ、そしてマルクス主義的な社会学、歴史社会学、文化哲学的な社会学といった変種とは区別されることによって可能になるとされた。フォン・ヴィーゼの「門番（gate-keeper）」としての立場は、独自の雑誌をもつ研究所を運営することによってのみならず、社会学大会の第一書記、世話人として、そしてドイツ社会学会の機関誌を担う雑誌の編集者として、ドイツ社会学会に対して並外れた影響力をもったことによって強められた（参照、Gorges 1986: 97）。「同じく書評欄もとりわけフォン・ヴィーゼと彼に近い人びとによって書かれるようになったことを付け加えるならば、ヴィーゼの立場の戦略的な位置づけが明らかとなる。書評欄では専門分野としての社会学にとって重要であると判断された新しい刊行物が関係学の視点から検討され、その検討結果はドイツ社会学会の半公式的な見解と考えられるようになった」（Stölting 1986: 170）。

研究所、雑誌、ドイツ社会学会への影響力、政治的な状況の巧みな切り抜け——われわれが今日から振り返ってみると、フォン・ヴィーゼは成功したホモ・アカデミクスの典型例のように思われる。

われわれがフォン・ヴィーゼのキャリアと制度を考慮して振り返ってみると、彼は

評価と影響力が得られる制度的装置全体を意のままにできたわけではなく、大部分は自分自身で執り行っていた。……[彼に利用できたのは]科学社会学のレシピ本に書かれていること、つまり学術内部の評価を得て長く古典として続くために行われることの、文字通りすべてであった。（Kaesler 1997: 236-7）

しかし、分野特有の境界設定や、評価獲得の試みにもかかわらず、フォン・ヴィーゼ（とアルフレート・フィーアカントも）の形式社会学は、ヴァイマル共和国の初めには「統合効果」を発揮するにも好都合なものとなった。「というのまさに、形式社会学は表面上、特定のイデオロギー的な信仰告白に拘束されないからである」（Nolte 2000: 140）⁽⁷⁾。そのうえ形式社会学は、批判者であれば見過ごすことのできない軌轢的にもなり、ゲオルク・ジンメルとともに論争もまた統合の因子であると理解するならば（参照、Kneer und Moebius 2010）、形式社会学も結局は社会学の一定の凝集性に寄与するものであった。その意味で、レオポルト・フォン・ヴィーゼによる試みは、両義的なものと評価されている。というのも、フォン・ヴィーゼの試みはフォン・ヴィーゼ自身の社会学だけではなく、社会学そのものを全体として制度的・組織的に強化したからである（参照、Kaesler 1997: 242）。それ以来、社会学は専門ディシプリンとして専門職化と分出を始め（参照、Stölting 1986）、フォン・ヴィーゼはその点に制度的な水準で（内容的な水準ではそれほどでもないが）決定的に貢献した。それでは彼の関係学はどうなったのか。関係学は確かに、フォン・ヴィーゼによる制度化の努力がうまくいったことで大いに認知され、1920年代初頭には社会学の潮流のなかで最も重要なものの一つと見なされていたが（参照、Kaesler 2008: 85）、続く世代のあいだでは、一時期彼の学生であったハワード・ベッカーといった例外を除き、ほとんど影響を及ぼさなかった（参照、Shils 1975: 78; von Alemann 1981: 359 以下）。

『ケルン四季報』創刊号では、フォン・ヴィーゼ（本号に再録した創刊論文と関係学の方法論に関する論文）以外にも、マックス・シェーラーが認識の社会学の課題に関する知識社会学論文、フェルディナント・テンニースがドイツ社会学会に関する論文、クリスティアン・エッカートが研究所の課題に関する論文、アルフレート・フィーアカントが形式社会学説のプログラムに関する論文を公刊している⁽⁸⁾。その後に続く諸号では、特に今挙

⁽⁷⁾ しかしこの中立性は、ノルテ（Nolte 2000: 141-2）が強調するように、形式社会学とその準拠単位である「集団」とが右派の社会学説（Gesellschaftslehre）にいよいよ近づくにつれて、1930年頃には「幻想」であることがわかってきた。

⁽⁸⁾ Gorges（1986: 108-9, 289-92, 495-8）を参照。ゴルゲスはその中で他の著者と主題領域の概要も詳しくまとめている。加えて、Stölting（1986: 170-171, 注74）も参照。

げた人びとに加えて、ルドルフ・ゴルトシャイト、ハンス・ケルゼン、ヴィルヘルム・イエ
ルザレム、ロベルト・ミヘルス、リヒャルト・トゥルンヴァルト、ヴェルナー・ゾンバルト、
アンドレアス・ヴァルター、マックス・ツー・ゾルムス伯、パウル・ルートヴィヒ・ラン
ツベルク、フリードリヒ・ヘルツ、フランツ・オッペンハイマー、カール・ブリンクマン、カー
ル・ドゥンクマン、ルドルフ・ヘベルレ、テオドール・ガイガー、オトマール・シュパン、
マックス・ルンプフ、ロバート・E・パーク、ピティリム・A・ソローキン、ゼーバルト・
ルドルフ・シュタインメッツ、シャルル・ブーグレ、ヘルムート・プレスナー、ハワード・ベッ
カー、ヨハン・ブレンゲ、カール・マンハイムが著者に名を連ねている。また著者にはケー
テ・パウアー＝メンゲルベルク、マリア・シュタインホフ、ハンナ・モイター、ゲルトルー
ト・ファスハウアー、シャルロッテ・フォン・ライヒェナウなど、女性も若干名見出される。

3 ヴァイマル共和国における社会学の雑誌界

『ケルン四季報』の創刊から数年を経て、この種の企画を行うための経済的な基盤が整
うにしたがって、さらに複数の社会学雑誌が創刊されることとなった⁽⁹⁾。ここで挙げて
おきたいのは、ゴットフリート・ザロモンが1925年に創刊した『社会学年報』（*Jahrbuch
für Soziologie*）である。この雑誌は結局3巻のみの刊行に終わるが、『ケルン四季報』よ
りもより経験的かつ国際的なものが目指されていた。この年報の著者には、例えばセレス
タン・ブーグレ、モーリス・アルヴァックス、ロバート・H・ローウィ、ルネ・モニエ、
ロベルト・ミヘルス、ガエタノ・モスカ、ピティリム・A・ソローキン、高田保馬、テン
ニース、フィアカントが名を連ねているが、さらにフォン・ヴィーゼの名も含まれている。
より国際的な雑誌を目指したものとしては、同じくザロモンの編集発行で1926年に公刊
された、ルートヴィヒ・シュタイン創刊『体系的哲学論叢』（*Archiv für systematische
Philosophie*）の社会学篇がある。他にも1925年から1927年まで刊行された雑誌とし
て『エートス——社会学・歴史哲学・文化哲学四季報』（*Ethos: Vierteljahresschrift für
Soziologie, Geschichts- und Kulturphilosophie*）があり、キエフからベルリンに逃れてい
たダーフィット・コイゲンが編集発行を行っていた。この雑誌に寄稿していた社会学の
著者には、特にテンニース、フィアカント、ドゥンクマン、ガイガー、ミヘルス、ヴァ
ルターがいる。ザロモンの『年報』やコイゲンの『エートス』よりもさらに国際色が強
く個性的であるのが、リヒャルト・トゥルンヴァルトとブロニスワフ・マリノフスキー

⁽⁹⁾ 以下の記述は特にシュテルティング（Stölting 1986: 172 以下）の報告をもとにしている。

が同じく 1925 年以来編集発行人を務めた『民族心理学・社会学雑誌』（*Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*）である（この雑誌は 1932 年から題名が『ソシオローグス』（*Sociologus*）になる）。『ケルン社会学四季報』とは異なり、トゥルンヴァルトの雑誌は社会学的知識の実践的・政治的応用（参照、Stölting 1986: 180）や経験的研究にもはっきりと門戸を開いており、1945 年以前にすでにアメリカの社会調査を受容していた。そのため、ここでも国際性をはるかに大きな役割を果たしていた。この雑誌は『ケルン四季報』やザロモンの『年報』、さらに『社会科学・社会政策論叢』（*Archiv für Sozialwissenschaften und Sozialpolitik*）と比べて、「はっきりと国際的な論文を数多く」含んでいた（Sieg 2002: 144; 参照、Stölting 1986: 184）。したがって、年を経るごとに例えばウィリアム・F・オグバーン、エドワード・サピア、ソローキン、シュタインメッツが共同編集発行人を務めたことに加えて、この雑誌は 1932 年から副題に *A Journal of Sociology and Social Psychology* と添えられて 2 言語で刊行されるようになった。この副題がトゥルンヴァルトの学生であったルネ・ケーニヒを介して、1955 年からの『ケルン社会学・社会心理学雑誌』というタイトルを想起させることは偶然ではない⁽¹⁰⁾。クレメンス・アルブレヒト（Albrecht 2013: 402）はトゥルンヴァルトの雑誌が進んだ方向について、以下のように表現している。「それは定量的で経験的な方法を用いて知識を集める現代科学としての社会学に賛同する確固とした意見表明であり、そこで目指された知識は、構造機能主義的な理論によって解釈され、実践的・政治的な応用に役立ちうるものであった」。もっとも、その国際性はドイツの社会学者たちの参加と負の対応をしている。この雑誌は制度化のさなかにあったドイツ社会学のなかで『ケルン四季報』ほど影響を及ぼさず、そのことは特に民族学的な度合いを強めたアプローチが広まったことや、あるいはまさに国際的にも門戸を開いていたことに関わっているかもしれない（参照、Stölting 1986: 180）。

1928 年から 1933 年までは、1924 年に創刊されたベルリン応用社会学研究所の雑誌『北国』（*Nordland, Berliner Institut für angewandte Soziologie*）の後継誌として、カール・ドUNKマンによって『応用社会学論叢』（*Archiv für angewandte Soziologie*）が刊行された。この論叢は大きな議論となった主題を取り上げており（参照、Plessner 2002）、新しい民族共同体（*Volksgemeinschaft*）を宣伝していた。社会学はその観点から、「民族改革（*Volksreform*）に仕える科学」と見なされていた（参照、Stölting 1986: 186-7）。

⁽¹⁰⁾ Albrecht (2013: 400) と Moebius (2015: 57-8) を参照。ケーニヒはトゥルンヴァルトの雑誌のなかで、「現代フランス社会学の最近の潮流」についての最初の論文（*Die neuesten Strömungen in der gegenwärtigen französischen Soziologie*, 1931-1932）を書いており、そこでも同様に国際的な社会学を受容することの意義を示している（参照、Moebius 2015: 57; また König 1973: IX-X も参照）。

以上が『ケルン四季報』を組み込みうる社会学の雑誌界であった⁽¹¹⁾。もちろん、出版物が1920年代の社会学界の布置連関全体を反映しているわけではない（参照、König 1961; Stölting 1986; Gorges 1986; Nolte 2000）。しかし以上の出版物は、社会学界の生成にとって重要であった、いくつかの立場と言説を説明している。というのも、社会学とは何かをめぐってまったく異なる言明が複数あったことは、社会学を制度化する上で妨げとなったのではなく、むしろ社会的言説界を構成することを容易にしたからである。

しかしこの多様性は、一見するとディシプリンの境界を曖昧にするものであるが、別の観点から見ればやはり制度化の過程を促すものであった。というのも、社会学者たちが社会学とは何か、社会学とは何でなければならないかをめぐって争うことによって、社会学者たちがその際に想定している何らかの存在や正当性に関わることになるからである。他の社会学の諸雑誌はたとえ否定的にであってもヴィーゼの雑誌を引き合いに出すことで、制度化に向けたヴィーゼの努力をまさに裏書きしていたのであり、そのことにヴィーゼ自身は気づいていなかった。（Stölting 1986: 191）

4 知識社会学論争と「新しい社会学の波（neue soziologische Welle）」

戦間期の社会学論争の文脈に、本号に再録したカール・マンハイムによる世代社会学の二つの論文〔Mannheim 1928=1976〕も含まれる。マンハイムは1920年代中頃に、文化社会学からいっそう知識社会学に向かうようになり（参照、Barboza und Lichtblau 2009: 12-3; Blomert 1999: 183 以下; Lichtblau 1996: 492 以下）、1925年にはハイデルベルクにてアルフレート・ヴェーバー、カール・ブリンクマン、エミール・レーデラーのもとで保守主義に関する知識社会学論考を教授資格論文として提出した。同じく1925年に『社会科学・社会政策論叢』で「知識社会学の問題」（„Problem einer Soziologie des Wissens“）を刊行した。マンハイムによれば、文化の過程と世界観、およびそれらの形式、内容、妥当性は、それぞれの社会的・歴史的な立場、接続する経験の空間と世代の経験にさかのぼって拘束されている。つまりそれらの形式、内容、妥当性は存在状況との機能的な関係にあり、そのことをマンハイム（Mannheim 1931: 660 [=1975: 293]）は後に「知識の存在被拘束性（Seinsverbundenheit des Wissens）」と呼んだ。世代状態の分析は、本号に再録した2論

⁽¹¹⁾ フランクフルトの『社会研究雑誌』（*Zeitschrift für Sozialforschung*）は1932年によく創刊されたため、ここでは除外している。

文でマンハイムが行っているように、「世界観の分析をさらに分化させること」（Barboza und Lichtblau 2009: 23）を可能にするものであった。マンハイムは「世代状況」（「生まれによる『同じ歴史的な生の共同体』」、「世代連関」（「共通の運命」と分かち合われた問題地平とに「関わること」）、そして「世代統一」（問題地平に対する特定の扱い、例えばリベラルな思考様式か保守的な思考様式かといった意味でときに対立もする反応）の三者を区別した。

マンハイムの二つの論文は『ケルン四季報』で1928年に公刊された。そこに含まれているのは、若きマンハイムが社会学の内外で「シューティング・スター」（〔ウルフ・〕マティーゼン）として持ち上げられ激しい論争的となったのと同じ年のさらなる成果である。チューリヒで開かれた第六回ドイツ社会学学会大会でマンハイムは、「精神的なものの領域での争い」に関する講演を行ない、その講演は1929年に刊行された『イデオロギーとユートピア』とともに「知識社会学論争」（参照、Srubar 2010）を先頭に立って引き起こし、「ドイツ社会学学会の中心で反乱」（König 1987: 356）を示した。全世代のドイツ学者の代表者たち、アルフレート・ヴェーバーやヴェルナー・ゾンバルトから、オットー・ノイラート、マックス・ホルクハイマー、エルンスト・ローベルト・クルツィウス、マックス・アドラー、ハンナ・アーレント、ヘルベルト・マルクーゼ、カール・アウグスト・ヴィットフォークルに至るまでがみなマンハイムのテーゼを論争的に論じていた（参照、Meja und Stehr 1982）。彼らはマンハイムを社会学主義か、相対主義か、社会学的唯物論か、さもなければ「亜流マルクス主義（Submarxismus）」として非難し、そうすることで同時に精神的なものの領域における争いに関するマンハイムの知識社会学の主張を裏書きしていた。

「1928年というまさに同じ年にマンハイムの《世代の問題》に関する論考が、体制側の終身《書記》であるレオポルト・フォン・ヴィーゼ編の『ケルン社会学四季報』7巻で公刊されたことは、社会学史上のよくできた小話である……。この小話の意義は、よりによってこの主題とともに、マンハイムら新しい世代のメンバーによる世代交代の道が開かれ、さらにそれとともに一連の新しい主題に着手されるようになったことにある」（König 1987: 353）。

思考様式の存在被拘束性と競争というテーゼによって、本来マンハイムはそうした異なる立場の間の了解に関わっていた。そしてマンハイムもまた、統一的な視点を追究している。特に社会的に「自由に浮動する知識人」に対してマンハイムは、鳥瞰的な視点を持ち、局所的視点の間に合理的な総合を打ち立てることのできる能力を認めていた。したがって、マンハイムは「最終的には総合を夢想し、世俗にまみれたイデオロギーの王国の上方に知

識人を持ち上げること」に迫り着き（Ringer 1987: 384 [=1991: 294]）、それとともにマンハイムの批判者たちの立場からもはやさほど遠くない地点に立つことになった。

ケーニヒ（König 1987: 353 以下）によれば、マンハイムの論文、講演、著書は、1933 年以前に社会学の旋律がまだすべては奏でられていなかったことを示す証左であった。そのことを示すように、シェルスキー（Schelsky 1959: 37）は上記の「新しい波」がドイツ社会学会の「体制側」によって直ちにブレーキがかけられたと主張した（König 1987: 355 以下）。

ヴァイマル共和国のこの「新しい波」に、ケーニヒ（König 1987: 380）は自身が「好戦的ヒューマニスト」と名づけたテオドル・ガイガーを含めている。本号に再録したガイガーの論文「自然淘汰、社会階層、世代の問題」（1934）は、『ケルン社会学四季報』最終 12 巻で同誌の新項目の一つ、1932 年から設けられた「生物社会学（Biosozilogie）」部門のなかで公開された⁽¹²⁾。この論文は、ガイガーによる優生学と社会政策を主題とする一連のテキストと書籍の一部をなしている⁽¹³⁾。

優生学に関するガイガーのテキストについては、社会学史研究のなかで解釈と評価が分かれている。一方でガイガーは「淘汰と選別の措置」を支持し（Pinn 1987: 230）、そのことでナチズムに役だったと非難されている。トマス・マイヤー（Meyer 2001a: 115 以下）は社会民主主義の言説を考慮に入れた綿密な分析のなかで、ガイガーによる優生学批判の価値も認めているが、その姿勢と語彙選択は「権威主義的な人口政策」（Meyer 2001a: 130）を弁護するものであったと解釈している。というのも、ガイガーは例えば、ナチズムを批判したにも関わらず、特定の条件下での強制断種は有意義なものと考えていたからである。他方で特に強調されるのが、ガイガーが遺伝学の素朴な理解に基づく生物学的

(12) シュテルティング（Stölting 1986: 171, 注 74）は、1933-1934 年にさらに《経営社会学》と《社会教育学》が加わった同誌の別巻について以下のように記している。「『生物社会学』部門を加えた『ケルン四季報』の拡張は、相当に抜け目ないものであった。つまり、そこで取り上げられた論文はナチズムのイデオロギーに対抗せず、この雑誌の従来の射程からも逸脱しないものであった」。しかしこのことは、「支配的な時代精神」やますますポピュラーになった民族衛生学的な言説への「順応」とも言いうる（Pinn und Nebelung 1990: 190）。

(13) ガイガーは 1928 年にブラウンシュヴァイク工科大学の社会学講座（Soziologieprofessur）に着任した。彼は戦間期に特に『大衆とその活動』（*Die Masse und ihre Aktion*, 1926）やフーアウントによる辞典の中心的な項目（社会学、共同体、社会、革命、指導）の執筆、そして『ドイツ民族の社会階層』（*Die soziale Schichtung des deutschen Volkes*, 1932）によって国際的にも広く知られるようになった。しかしガイガーは長年ドイツ社会民主党（SPD）に所属し、ブラウンシュヴァイクでアドルフ・ヒトラーのために計画された社会学説講座（Professur für Gesellschaftslehre）を妨げ、かつ数年前よりすでにナチ党（NSDAP）を公けに批判しており、1933 年にデンマークへ亡命した。1938 年にそこで彼はデンマーク初の社会学教授となった。1945 年以降は亡命先のスウェーデンからデンマークに戻り、国際社会学会（International Sociological Association, ISA）の設立時にはスカンディナヴィア諸国の代表者として参加した。

な優生学の基礎づけと優生学運動とに対して社会的かつ自然科学的にも示唆のある批判を行ない、生政治的（biopolitisch）な措置に対して社会政策的な措置を擁護したことである（参照、Holzhauser 近刊；Schwartz 1995: 159）⁽¹⁴⁾。少なくとも本号に再録したガイガーの論文は、社会政策を余計かそれどころか有害なものと考えていた「優生学政策（Erbpflegepolitik）」と優生学者の支配的な見解とに対する批判と見るべきである。ガイガーはそうした見解とは異なり「優生学（Erbpflege）」を社会政策よりずっと意義のないものと見なし、自身の論考では社会構造の社会的・歴史的側面を中心に据えていた。なぜなら、ガイガーがその論文（Geiger 1934: 161 [2017: 122]）に記しているように、社会階層の形成の起源は「およそ人間という生き物の群れの内部での自然淘汰ではなく、ある集団が別の集団を服従させることに基づく……」からである。それゆえ社会階層も「自然淘汰」の産物ではないとされる。ガイガーは評価基準が歴史的に偶有的で支配に沿った特徴をもつことを示すことで、優生学の言説を歴史的・知識社会的な視点から論破しようと試みた。社会的地位の違いは生物学から導出されるのではなく、その反対である。つまり「個別の社会階層に（表面上）たびたび見出される特定の才能型の社会的評価は、歴史的に条件づけられており、文化様式の入替わりとともに移り変わるものである。……自然的な才能の諸変異は、生物学的な価値づけによって比較されるのではなく、その時代に妥当する価値の序列を基準とした地位を受け取っている」（Geiger 1934: 165 [2017: 138]）。階層の入替わりも特定の社会階層への所属も、ガイガーから見れば自然淘汰の公理によって説明されるものではなく、さらに言えばその公理は支配層の象徴的権力とイデオロギーを表現するものとして脱構築されるべきものであった。つまりガイガーがピエール・ブルデュエの諸仮定を先取りして記しているように、「高位の階層による生殖を過大評価する仮定が高位に生まれた者たちの自己賞賛のイデオロギーであるのと同じく、『才能ある者の昇進』のテーゼは昇進に成功した者のイデオロギーである」（Geiger 1934: 173 [2017: 133]）。

5 ケルン研究所の廃止と『四季報』の休刊

1934年に研究所全体が廃止されるとともに、『四季報』も休刊となった。「表向きの廃止理由はケルン市の緊縮策にあったかもしれない。しかしまた確かに、フォン・ヴィーゼが

⁽¹⁴⁾ 筆者はガイガーの他のテキストについて、この主題と他のさまざまな点をめぐってニコレ・ホルツハウザーから有益な指摘を受けた。

同誌の最終号で推測したように（von Wiese 1934: 2）、市議会議員たちに研究所とそれまでの支配政党との関係が緊密なものであったと思われたことも決定的であった」（Dreier 2016: 4; また以下も参照、Klingemann 1988: 79-80; Pinn und Nebelung 1990: 189）。この研究所の廃止によって浮いた予算は、ヴィルヘルム・ベルガーのドイツ社会主義研究所（Institut für Deutschen Sozialismus）に向けられた（参照、Klingemann 1988: 80）。フォン・ヴィーゼは、『四季報』に代わるものとして最終的には実現しなかった年報の編集発行を計画し（参照、Klingemann 1988: 79）、大学の社会学演習で正教授として教育と研究を続けた。ドイツ社会学会は、フォン・ヴィーゼ（von Wiese 1948a: 4）が自己統制の戦略を探し自身の社会学をナチス体制に提供しようと試みながらも後に主張したように、「上から統制」されたのではなかった（van Dyk und Schauer 2015: 47; Klingemann 1988: 82）。ドイツ社会学会はむしろ「1933年に理事会の提案で任命された《指導者（Führer）》ハンス・フライヤーによって、1934年に活動休止した」（Schnitzler 2016: 1）。その活動休止は、「リベラル」あるいは「予防的な救護措置」の結果ではなく、ナチズムに仕えようとした二つの立場の特殊な競争状況に基づくものであった（参照、van Dyk und Schauer 2015: 46以下, 144; Borggräfe und Schnitzler 2014: 454, 458; Klingemann 1996: 11以下; Schäfer 1990: 141）。それからドイツ社会学会の機関誌は、ハンス・フライヤー、マックス・ヒルデベルト・ベーム、マックス・ルンプフ編集発行の『民族の鏡——ドイツ社会学・民族科学雑誌』（*Volksspiegel: Zeitschrift für deutsche Soziologie und Volkswissenschaft*）が担うことになった（参照、Stölting 1986: 192-3; Borggräfe und Schnitzler 2014: 456）。この雑誌はその後、編集発行人の相次ぐ離脱によって、ナチスの『教育民族研究・民族性形成雑誌』（*Zeitschrift für pädagogische Volksforschung und Volkstumgestaltung*）に変わった⁽¹⁵⁾。

6 1945 年以後——雑誌の再刊と西ドイツ戦後社会学の中心的主題

雑誌の再刊は、1948年に『ケルン社会学雑誌——社会学四季報新シリーズ』（*Kölner Zeitschrift für Soziologie: Neue Folge der Vierteljahrshefte für Soziologie*）という題のも

⁽¹⁵⁾ 本稿は『ケルン雑誌』にみる社会学の歴史を扱っているため、ナチズムにおける社会学を特段に主題とはしていないが、さしあたり Maus (1959)、Stölting (1984)、van Dyk und Schauer (2015)、Christ und Suderland (2014) を参照のこと。最初のハインツ・マウスの論文は、Lepsius (1979, 1981b)、Srubar (1988)、Fleck (2007) のように亡命者の社会学についても論じている。ナチズム期に社会学の連続性を見出しているのは、Klingemann (1996, 2009) と Rammstedt (1986) である。その主張には異論がないわけではなく（例えば Lepsius 2008: 36-7 を参照）、1933年以後の社会学の連続性と非連続性をめぐる論争を今日まで誘発している。この点について、示唆的なまとめを行い経験的に非連続性テーゼを立証している Holzhauser (2015) を見よ。

とで行なわれた。この雑誌は1947年に設立された社会科学・行政学研究所の社会学部門が担うものとされ（参照、Haupts 2007: 116 以下）、編集発行人はレオポルト・フォン・ヴィーゼであった。フォン・ヴィーゼは1946年にすでに、アメリカ占領区域ドイツ高等弁務官（US-HICOG [High Commissioner of Germany]）幹部でありドイツの学術システムに精通していたエドワード・Y・ハーツホーン（参照、Tent 1998）⁽¹⁶⁾の支持を得てドイツ社会学会を再建しており（参照、von Wiese 1959: 17）、同学会の戦後最初の会長となって1946年9月にフランクフルト・アム・マインで第八回社会学会大会を開催していた。その参加者たちにとって、ナチズムと、ファシズムによる何百万もの人びとのシステムティックな殺害とは——ナチズムの社会学を強く求めたハインツ・マウスは例外として（参照、Demirovic 1999: 299 以下 [=2009 (1): 78 以下] ; van Dyk und Shauer 2015: 152 以下）——社会学的な分析に値するものではなかった。しかし総じて、フォン・ヴィーゼ(von Wiese 1948b: 29)が開会の辞で、外から来た「ペスト」と「社会学者が触れることのできない」「形而上学的な神秘」とについて述べているところからも明らかなように、黙殺、抑圧、形而上学的なものへの転移が一般的なモットーであった。反対に、予防的な救護措置として活動休止をしたという作り話は、ドイツ社会学会の再建にとって連合国向けに有利に働いた（参照、van Dyk und Shauer 2015: 144 以下）。

戦後社会学の中心的な主題は、産業社会学、家族社会学、青年社会学、社会階級、社会階層、社会移動であった（参照、Moebius 2016b）。M・ライナー・レプシウス（Lepsius 1979: 35）は、第二次世界大戦後の社会学を概括する論文のなかで諸アクターと地域の中心地に関して、以下のように記している。西ドイツ戦後社会学の基本的な布置連関は「ベルリン、フランクフルト、ケルン、ハンブルクに新たに設立された四つの中心地によって規定された。さらに、そこに続く重要な拠点として、フライブルクとゲッティンゲンが加わった。以上の地で社会学は、講座を担う教授の特徴を反映してそれぞれ独自の特色を帯びていた。さらに、マックス・ホルクハイマーとテオドル・W・アドルノがフランクフルトで、ヘルムート・プレスナーがゲッティンゲンで、ルネ・ケーニヒがケルンで、アルノルト・ベルクシュトレッサーがフライブルクで、ヘルムート・シェルスキーがハンブルクで、そしてオットー・シュタマーがベルリンで、個人的な小サークルも形成していた。……彼らは共通して、社会学を独立の専門職化されたディシプリンとして確立しようという戦略を1950年代に支持しており、また各人の認識関心と学術政策上の志向に違いがあるとはいえ、共通して経

⁽¹⁶⁾ ハーツホーンは特に1937年に『ドイツの大学と国家社会主義』（*The German Universities and National Socialism*）に関する批判的で経験的な研究を公開している。

験的研究を促していた。彼らを戦後社会学の創設世代としてまとめることは、正当であると思われる……」（Lepsius 1979: 35-6）。

確かに多くの違い（伝記的、イデオロギー的、習慣的に）があったが、「初期のカリスマたち」（Bude 2002）は共通して経験的方針をもっていたことに加えて、「戦後状況と崩壊した社会について、その具体的な現状と有力な構造を政治的・社会的に解明することへの決然とした意志」（Bude 2002: 409）で一致していた。西ドイツ初期の社会の諸過程と問題状況は特に、先進工業社会への産業と社会構造の変動によって特徴づけられた。その変動には、「経済の奇跡」によって変化した消費行動と余暇行動、家族の構造変化そして都市化が特に含まれた。そうした過程に政治的に並行していたのが、西側への統合、再軍備化、ドイツ共産党（KPD）の非合法化、そしてナチズムの抑圧である（参照、Conze 2009: 184 以下）。

戦後期を主導する社会学と見られていたのは（参照、Dahrendorf 1960）、ルネ・ケーニヒ周辺のケルン学派、フランクフルト学派、そしてヘルムート・シュルスキー（当初ハンブルク、後にミュンスター）であった⁽¹⁷⁾。各学派には方針の違いがあり、学派どうしの連携にも入れ替わりがあったにもかかわらず（参照、Moebius 2015: 12 以下）、「世代特有の研究合意」（Bude 2002: 413）があり、社会の構造変革に対して似たような反応を示していた。要するにみなが一様に産業社会学、地域社会学、家族社会学に関心をもっていた。1946年にすでにルネ・ケーニヒが亡命先のスイス連邦評議会の依頼で家族調査を行っており（参照、Zürcher 1995: 242 以下）、シュルスキーの最初の家族研究はケーニヒのその研究に基づいている（参照、Tyrell 1986: 45）。「家族」は一方で「戦中と戦後に条件づけられた解体現象」を示し、他方で「撤退の避難先として意義を獲得」したがゆえに（Conze 2009: 187）、戦後ドイツで特に意義をもった。ケーニヒとシュルスキーは家族の統合因子と安定性因子を強調したが、アドルノとホルクハイマーは家族を1930年代半ばから、権威に密着した行動を訓練するための制度、ただし近代ではますます解消されつつある制度と見なしていた（参照、Schäfer 1996: 385 以下）。

本号に再録したヘルムート・シュルスキー（Schelsky 1951）のテキストは、こうした文脈で理解されるべきである。このテキストは1949年以来シュルスキーが書いた数多く

⁽¹⁷⁾ その上でしかし内容としては、本号に再録した諸論文には出てこないか周辺的にしか出てこない、西ドイツの戦後社会学を代表する他の重要な人物たちの意義を忘れるべきではないだろう。例えば、ヴォルフガング・アーベントロートやヴェルナー・ホフマンらのマルクス主義志向のマルブルク学派、オットー・シュタマー、ヘルムート・プレスナー、アルノルト・ベルクシュトレッサーが想起される。また以下で論じることはできないが、その数十年後にも例えばトマス・ルックマンらのコンスタンツ学派やポスト構造主義学派など、重要な学派が現われている。

の家族社会学論文の一つであり（参照、Tyrell 1986: 54-5, 注 2, 5, 7）、難民家族を取り上げている。シェルスキーのテーゼによれば、難民家族はドイツ社会の家族構成にとって例外や反対物を示すものではなく、現代における家族の変化と近代化との「際立った先端的な形式」を表している（Schelsky 1951: 163, 172 [2017: 146, 154]）。この論文が依拠しているのは、ハンブルク公共経済アカデミー（Akademie für Gemeinwirtschaft in Hamburg）の学生たちによって 1949 年半ばと 1950 年半ばに行なわれ、助手のゲアハルト・ヴルツバッハーが監修した経験的研究であり、ヴルツバッハーは自身の研究でこの経験的調査について報告している（1951「現代ドイツ家族生活の主要モデル——164 家族へのモノグラフの社会学的分析の方法、成果、社会教育学的な帰結」）。そこで認められるとされたのが、明らかな「引きこもり」の過程、そこから帰結する「親密集団の過剰要求」とそれに関わる大組織の忌避と脱政治化傾向である（Schelsky 1951: 173-4 [2017: 156 以下]）。シェルスキーはここで政治的無関心と非政治的な「われわれ抜き（Ohne-uns）」の心性を見てとり、同時代にデイヴィッド・リースマンが『孤独な群衆』——そこにシェルスキーが序文を寄せている——で提示し、後にリチャード・セネットの『公共性の喪失』（1976）によって一般的になったのと類似の結論に至っている。ただし、シェルスキーは戦後まもない時期に「親密集団」に焦点を当てているものの、「新しい内面性（neue Innerlichkeit）」よりも、むしろ経済的なものの優先、脱エロス化と「脱内面化」（Schelsky 1951: 170 [2017: 152]）、そして家族関係の「物象化」（Schelsky 1951: 172 [2017: 154]）について記している。したがって、その観点から見ると、教育、職業、復興への集中がいわゆる「経済の奇跡」の原動力であった。いずれにせよシェルスキー（Schelsky 1951: 176 [2017: 157]）は社会理論的に、（難民）家族の例に制度的な安定化過程を見出している。その過程は当時展開されていた彼の制度的柔軟性の公理、つまり「変化のなかの安定性」と「安定的な制度変化」の公理を説明している（参照、Schäfer 2015a: 12; Wöhrle 2015: 61 以下）。以上の研究成果は、1950 年 10 月にデトモルトで開かれた第十回ドイツ社会学大会ですでに報告されており、他の論文とあわせて 1953 年公開の著書『現代ドイツ家族の変化』（*Wandlungen der deutschen Familie in der Gegenwart*）に収録された⁽¹⁸⁾。

上述の論文は、近年ゲアハルト・シェーファー（Schäfer 2015a）が詳しく分析したような、西ドイツの「スター社会学者」となったシェルスキーの全盛期に書かれたものである。そのハンブルク時代にシェルスキーは 1948 年から公共経済アカデミー

(18) シェルスキーの家族社会学について、詳しくは Wöhrle (2015: 62 以下) を見よ。ヴェーレは Schäfer (2000: 126-7) や Tyrell (1986) と同様に、シェルスキーによる女性の役割についての矛盾する言明にも言及している。

教授、1953年からハンブルク大学教授となり、「平準化された中流社会（nivellierte Mittelstandsgesellschaft）」と「懐疑的世代（skeptische Generation）」という成功した定式化もこの時期に提起している（Schäfer 2015a: 7; 以上の「定式化」については、Wöhrle 2015: 125 以下または 87 以下を参照）⁽¹⁹⁾。シェルスキーは高等教育者としても数多くの教授資格論文と博士学位論文をとおして影響力をもち（参照、Schäfer 2015a: 20-1）、ゲアハルト・ヴルツバッハーの他に、ルドルフ・タートラー、ヤンペーター・コープ、ハインツ・クルト、フリードリヒ・ヨナス、ハンス＝ユルゲン・クリスマンスキ、レナテ・クリスマンスキ、ラース・クラウゼン、ルーク・ヨヒムゼン、レナテ・ラウシュ、トマス・ノイマンほか、さらにハンス・パウル・バルト、ハインリッヒ・ポピッツ、アルノ・クレーネ、そしてラルフ・ダーレンドルフなど多くの人物を指導している（参照、Schäfer 2015a: 3）。〔（下）に続く〕

参考文献

- Albert, Gert. 2010. Der Werturteilsstreit. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 14-45. Berlin: Suhrkamp.
- Albrecht, Clemens. 2013. Nachwort. In *Emile Durkheim. Zur Bestimmung der französischen Soziologie in Deutschland. Schriften* Bd. 8, René König, 387-413. Wiesbaden: Springer VS.
- Alemann, Heine von. 1981. Leopold von Wiese und das Forschungsinstitut für Sozialwissenschaften in Köln 1919 bis 1934. In *Geschichte der Soziologie*, Bd. 2, Hrsg. Wolf Lepenies, 349-389. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Barboza, Amalia, und Klaus Lichtblau. 2009. Einleitung. In *Schriften zur Wirtschafts- und Kultursoziologie*. Karl Mannheim, 7-29. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Blomert, Reinhard. 1999. *Intellektuelle im Aufbruch. Karl Mannheim, Alfred Weber, Norbert Elias und die Heidelberger Sozialwissenschaften in der Zwischenkriegszeit*. München: Hanser.
- Borggräfe, Henning, und Sonja Schnitzler. 2014. Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie und der Nationalsozialismus. Verbandsinterne Transformationen nach 1933 und nach 1945. In *Soziologie und Nationalsozialismus. Positionen, Debatten, Perspektiven*, Hrsg. Michaela Christ und Maja Suderland, 445-79. Berlin: Suhrkamp.
- Bude, Heinz. 2002. Die Charismatiker des Anfangs. Helmuth Plessner, René König, Theodor W. Adorno und Helmut Schelsky als Gründer einer Soziologie in Deutschland. In *Lebenszeiten. Erkundungen zur Soziologie der Generationen*, Hrsg. Günter Burkart und Jürgen Wolf, 407-419. Opladen: Leske & Budrich.
- Caspari, Volker, und Klaus Lichtblau. 2014. *Franz Oppenheimer. Ökonom und Soziologe der ersten Stunde*. Frankfurt a. M.: Societäts-Verlag.
- Christ, Michaela, und Maja Suderland. Hrsg. 2014. *Soziologie und Nationalsozialismus. Positionen, Debatten, Perspektiven*. Berlin: Suhrkamp.
- Conze, Eckart. 2009. *Die Suche nach Sicherheit. Eine Geschichte der Bundesrepublik Deutschland von 1949 bis in die Gegenwart*. München: Siedler.

⁽¹⁹⁾ 自身のライプツィヒ時代の教師であったフライヤーやゲーレンと同様に、シェルスキーもナチ党员として活動していた（Schäfer 2014, 2015b; Wöhrle 2015: 17 以下参照）。

- Dahrendorf, Ralf. 1960. Die drei Soziologien. Zu Helmut Schelskys „Ortsbestimmung der deutschen Soziologie“. *KZfSS* 12:120-33.
- Dayé, Christian, und Stephan Moebius. Hrsg. 2015. *Soziologieggeschichte. Wege und Ziele*. Berlin: Suhrkamp.
- Demirovic, Axel. 1999. *Der nonkonformistische Intellektuelle. Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp. [= 2009-2011, 仲正昌樹責任編集『非体制順応的知識人——批判理論のフランクフルト学派への発展』第1-4分冊, 御茶の水書房.]
- Dörk, Uwe. 2016. Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie (DGS) in der Zwischenkriegszeit (1918–1933): Akademische Etablierung unter dem Zeichen elitär-demokratischer Kreisbildung. In *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Wiesbaden: Springer VS (i.E.)
- Dreier, Volker. 2016. Geschichte der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie. In *Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Doi: 10.1007/978-3-658-07998-7_44-1 (Zugegriffen: 01.07.2016). [Neu gedruckt 2017 als Die Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie. Zur Genese, Struktur und Entwicklung einer soziologischen Fachzeitschrift. In *KZfSS*, 69 (1 Supplement): 45-59.]
- Dyk, Silke van, und Stephan Lessenich. Hrsg. 2008. *Jena und die deutsche Soziologie. Der Soziologentag 1922 und das Soziologentreffen 1934 in der Retrospektive*. Frankfurt a. M.: Campus
- Dyk, Silke van, und Alexandra Schauer. 2015. „...daß die offizielle Soziologie versagt hat“. *Zur Soziologie im Nationalsozialismus, der Geschichte ihrer Aufarbeitung und der Rolle der DGS*. 2. Aufl., Jahrbuch für Soziologieggeschichte. Wiesbaden: Springer VS.
- Endreß, Martin. 2001. Zur Historizität soziologischer Gegenstände und ihren Implikationen für eine wissenschaftssoziologische Konzeptualisierung von Soziologie geschichte. In *Jahrbuch für Soziologieggeschichte* 1997/1998, Hrsg. Carsten Klingemann et al., 65–90. Opladen: Leske & Budrich.
- Fleck, Christian. 2007. *Transatlantische Bereicherungen. Zur Erfindung der empirischen Sozialforschung*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Geiger, Theodor. 1934. Natürliche Auslese, soziale Schichtung und das Problem der Generationen. In *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 12 (2): 159-83. [Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69 (1 Supplement): 121-42.]
- Gorges, Irmela. 1986. *Sozialforschung in der Weimarer Republik 1918–1933*. Frankfurt a.M.: Hain Verlag.
- Haupts, Leo. 2007. *Die Universität zu Köln im Übergang vom Nationalsozialismus zur Bundesrepublik*. Köln: Böhlau.
- Holzhauser, Nicole. 2015. Definitorische und methodologische Probleme bei der Analyse der soziologischen Disziplinentwicklung zur Zeit des Nationalsozialismus. In *Österreichische Zeitschrift für Soziologie* 40: 129-46.
- Kaesler, Dirk. 1984. *Die frühe deutsche Soziologie und ihre Entstehungsmilieus. Eine wissenschaftssoziologische Untersuchung*. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 1997. Die Gründung des Forschungsinstituts für Soziologie der Universität zu Köln und die zwanziger Jahre. In *Soziologie als Berufung. Bausteine einer selbstbewussten Soziologie*, Hrsg. Dirk Kaesler, 235–247. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 2008. Die Soziologie auf der Suche nach akademischer Respektabilität – Eine wissenschaftssoziologische Einordnung der Jenaer Debatten von 1922. In *Jena und die deutsche Soziologie. Der Soziologentag 1922 und das Soziologentreffen 1934 in der Retrospektive*, Hrsg. Silke van Dyk und Stephan Lessenich, 81-97. Frankfurt a. M.: Campus.
- Klingemann, Carsten. 1988. Kölner Soziologie während des Nationalsozialismus. In *Nachhilfe zur Erinnerung. 600 Jahre Universität zu Köln*, Hrsg. Wolfgang Blaschke, Olaf Hensel, Peter Liebermann und Wolfgang Lindweiler, 76-97. Köln: Pahl-Rugenstein.
- . 1996. Soziologen vor dem Nationalsozialismus: Szenen aus der mißlungenen Selbstgleichschaltung der Deutschen Gesellschaft für Soziologie. In *Soziologie im Dritten*

- Reich, Hrsg. Carsten Klingemann, 11-32. Baden-Baden: Nomos.
- . 2009. *Soziologie und Politik. Sozialwissenschaftliches Expertenwissen im Dritten Reich und in der frühen westdeutschen Nachkriegssoziologie*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Kneer, Georg, und Stephan Moebius. 2010. Vorwort. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 7-13. Berlin: Suhrkamp.
- König, René. 1961. Zur Soziologie der zwanziger Jahre. In *Die Zeit ohne Eigenschaften. Eine Bilanz der zwanziger Jahre*, Hrsg. Leonhard Reinisch, 82-118. Stuttgart: Kohlhammer.
- . 1973. Vorwort. In *Handbuch der empirischen Sozialforschung*. Bd. 1: Geschichte und Grundprobleme, Hrsg. René König, 3. Aufl., VI-XI. Stuttgart: Enke.
- . 1987. *Soziologie in Deutschland. Begründer/Verfechter/Verächter*. München: Hanser.
- Lepenies, Wolf. 1981. Einleitung. Studien zur kognitiven, sozialen und historischen Identität der Soziologie. In *Geschichte der Soziologie. Studien zur kognitiven, sozialen und historischen Identität einer Disziplin*, Bd. 1, Hrsg. Wolf Lepenies, I-XXXV. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Lepsius, Rainer M. 1979. Die Entwicklung der Soziologie nach dem Zweiten Weltkrieg 1945 bis 1967. In *Deutsche Soziologie seit 1945. KZfSS, Sonderheft 21*, Hrsg. Günther Lüschen, 25-70. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 1981. *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945. KZfSS, Sonderheft 23*, Hrsg. M. Rainer Lepsius. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 1981a. Die Soziologie der Zwischenkriegszeit: Entwicklungstendenzen und Beurteilungskriterien. In *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945. KZfSS, Sonderheft 23*, Hrsg. M. Rainer Lepsius, 7-23. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 1981b. Die sozialwissenschaftliche Emigration und ihre Folgen. In *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945. KZfSS, Sonderheft 23*, Hrsg. M. Rainer Lepsius, 461-500. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 2008. *Soziologie als Profession*. Hrsg. Adalbert Hepp und Martina Löw, Frankfurt a. M.: Campus.
- Lichtblau, Klaus. 1996. *Kulturkrise und Soziologie um die Jahrhundertwende. Zur Genealogie der Kultursoziologie in Deutschland*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Mannheim, Karl. 1928. Das Problem der Generation. In *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 7 (2): 157-85, 7 (3): 309-30. [Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69 (1 Supplement): 81-119.; = 1976, 鈴木広記「世代の問題」樺俊雄監修『マンハイム全集 3 社会学の課題』潮出版社, 147-232.]
- . 1931. Wissenssoziologie. In *Handwörterbuch der Soziologie*, Hrsg. Alfred Vierkandt, 659-680. Stuttgart: Enke. [= 1975, 樺俊雄訳「知識社会学」樺俊雄監修『マンハイム全集 2 知識社会学』潮出版社, 291-364.]
- Maus, Heinz. 1959. Bericht über die Soziologie in Deutschland 1933-1945. *KZfSS* 11: 72-99.
- Meja, Volker, und Nico Stehr. Hrsg. 1982. *Der Streit um die Wissenssoziologie*. Zweiter Band: *Rezeption und Kritik der Wissenssoziologie*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Meyer, Thomas. 2001a. *Die Soziologie Theodor Geigers. Emanzipation von der Ideologie*. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag.
- Moebius, Stephan. 2004. *Praxis der Soziologiegeschichte. Methodologien, Konzeptionalisierungen und Beispiele soziologiegeschichtlicher Forschung*. Hamburg: Kovac.
- . 2015. *René König und die „Kölner Schule“. Eine soziologiegeschichtliche Annäherung*. Wiesbaden: Springer VS.
- . 2016a. Methodologie soziologischer Ideengeschichte. In *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 2, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Doi: 10.1007/978-3-658-07999-4_1-1 (Zugegriffen: 01.07.2016).
- . 2016b. Schulen, Akteure und regionale Zentren in der frühen Geschichte der bundesrepublikanischen Soziologie. In *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Doi: 10.1007/978-3-658-07998-7_14-1 (Zugegriffen: 01.07.2016).

- Moebius, Stephan, und Andrea Ploder. Hrsg. 2017. *Handbuch der deutschsprachigen Soziologie*. 2 Bde. Wiesbaden: Springer VS. (i.E.).
- Nolte, Paul. 2000. *Die Ordnung der deutschen Gesellschaft. Selbstentwurf und Selbstbeschreibung im 20. Jahrhundert*. München: Beck.
- Peter, Lothar. 2001a. Warum und wie betreibt man Soziologiegeschichte. In *Jahrbuch für Soziologiegeschichte* 1997/98, Carsten Klingemann, Michael Neumann, Karl-Siegbert Rehberg, Ilja Srubar und Erhard Stölting, 9-64. Opladen: Leske & Budrich.
- Pinn, Irmgard. 1987. Die rassistischen Konsequenzen einer völkischen Anthropologie. In *Rassenmythos und Sozialwissenschaften in Deutschland*, Hrsg. Carsten Klingemann, 212-41. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Pinn, Irmgard, und Michael Nebelung. 1990. Kontinuität durch Verdrängung. In *Jahrbuch für Soziologiegeschichte* 1990, Hrsg. Heinz-Jürgen Dahme, Carsten Klingemann, Michael Neumann, Karl-Siegbert Rehberg und Ilja Srubar, 177-218. Opladen: Leske & Budrich.
- Plessner, Helmuth. 2002. *Grenzen der Gemeinschaft. Eine Kritik des sozialen Radikalismus*. 1924. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Rammstedt, Otthein. 1986. *Deutsche Soziologie 1933-1945. Die Normalität einer Anpassung*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Rauhut, Heiko und Fabian Winter. 2017. Vernetzung und Positionierung der Kölner Zeitschrift für Soziologie (KZfSS) in der länder-, disziplinen- und sprachübergreifenden Diskussion. In *KZfSS* 69 (1 Supplement): 61-74.
- Ringer, Fritz K. 1987. *Die Gelehrten. Der Niedergang der deutschen Mandarine 1880-1933*. München: dtv. [= 1991, 西村稔訳『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』名古屋大学出版会.]
- Schad, Susanne Petra. 1972. *Empirical Social Research in Weimar-Germany*. Paris: Mouton. [= 1987, 川井隆男・大淵英雄監訳『ドイツ・ワイマール期の社会調査』慶應通信.]
- Schäfer, Gerhard. 1990. Wider die Inszenierung des Vergessens. Hans Freyer und die Soziologie in Leipzig 1925-1945. In *Jahrbuch für Soziologiegeschichte* 1990, Hrsg. Heinz-Jürgen Dahme, Carsten Klingemann, Michael Neumann, Karl-Siegbert Rehberg und Ilja Srubar, 121-175. Opladen: Leske & Budrich.
- . 2000. Die nivellierte Mittelstandsgesellschaft – Strategien der Soziologie in den 50er-Jahren. In *Die janusköpfigen 50er-Jahre. Kulturelle Moderne und bildungs- bürgerliche Semantik* III., Hrsg. Georg Bollenbeck und Gerhard Kaiser, 115-42. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- . 2014. Der Nationalsozialismus und die soziologischen Akteure der Nachkriegszeit: am Beispiel Helmut Schelskys und Ralf Dahrendorfs. In *Soziologie und Nationalsozialismus. Positionen, Debatten, Perspektiven*, Hrsg. Michaela Christ und Maja Suderland, 119-61. Berlin: Suhrkamp.
- . 2015a. Soziologie ohne Marx. Helmut Schelsky als „Starsoziologe“ und Intellektueller im Hamburg der 1950er-Jahre. Supplement der *Zeitschrift Sozialismus* 1/2015. Hamburg: VSA.
- . 2015b. Zur Herausbildung des philosophisch-soziologischen Denkens bei Helmut Schelsky in der Ära des Nationalsozialismus. In *Helmut Schelsky. Ein deutscher Soziologe im zeitgeschichtlichen, institutionellen und interdisziplinären Kontext*, Beiheft 22 der *Zeitschrift Rechts-theorie*, Hrsg. Reinhard Feldmann et al., 1-40. Berlin: Duncker & Humblot.
- Schäfers, Bernhard. 1996. Der Vereinigungsprozeß in sozialwissenschaftlichen Deutungsversuchen. In *Soziologie und Gesellschaftsentwicklung. Aufsätze 1966–1996*, Hrsg. Bernhard Schäfers, 181-92. Opladen: Leske & Budrich.
- Schelsky, Helmut. 1951. Die Flüchtlingsfamilie. In *KZfSS* 3 (2): 159-77. (Neu gedruckt 2017 in *KZfSS*, 69 (1 Supplement): 143-57.)
- . 1959. *Ortsbestimmung der deutschen Soziologie*. Düsseldorf: Diederichs.
- Schnitzler, Sonja. 2016. Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie zur Zeit des Nationalsozialismus. In

- Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Wiesbaden: Springer VS (i.E.).
- Schwartz, Michael. 1995. *Sozialistische Eugenik. Eugenische Sozialtechnologien in Debatten und Politik der deutschen Sozialdemokratie 1890-1933*. Berlin: Dietz Verlag.
- Shils, Edward. 1975. Geschichte der Soziologie: Tradition, Ökologie und Institutionalisierung. In *Soziologie – autobiographisch*, Hrsg. Talcott Parsons, Edward Shils und Paul Felix Lazarsfeld, 69-146. Stuttgart: Enke.
- Sieg, Alexander. 2002. *Konditionen und Strukturen internationaler Rezeption von Fachwissen in der frühen deutschen und amerikanischen akademischen Soziologie*. Diss. Berlin. URL: <http://webdoc.sub.gwdg.de/ebook/diss/2003/fu-berlin/2003/56/>, hier: <http://webdoc.sub.gwdg.de/ebook/diss/2003/fu-berlin/2003/56/teil3kap2.pdf> (Zugegriffen: 14.07.2016).
- Srubar, Ilja. Hrsg. 1988. *Exil, Wissenschaft, Identität. Die Emigration deutscher Sozialwissenschaftler 1933-1945*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- . 2010. Der Streit um die Wissenssoziologie. In *Soziologische Kontroversen. Eine andere Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Hrsg. Georg Kneer und Stephan Moebius, 46-78. Berlin: Suhrkamp.
- Stölting, Erhard. 1984. Kontinuitäten und Brüche in der deutschen Soziologie 1933/34. *Soziale Welt* 35: 48-59.
- . 1986. *Akademische Soziologie in der Weimarer Republik*. Berlin: Duncker & Humblot.
- . 2006. Die Soziologie in den hochschulpolitischen Konflikten der Weimarer Republik. In *Soziologie an deutschen Universitäten: Gestern – heute – morgen*, Hrsg. Bettina Franke und Kurt Hammerich, 9-30. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Tent, James F. 1998. *Academic Proconsul. Harvard Sociologist Edward Y. Hartshorne and the Reopening of German Universities, 1945-1946. His personal account*. Trier: WVT.
- Tyrell, Hartmann. 1986. Helmut Schelskys Familiensoziologie. In *Helmut Schelsky – ein Soziologe in der Bundesrepublik*, Hrsg. Horst Baier, 45-56. Stuttgart: Enke.
- Wiese, Leopold von. 1921. Zur Einführung: Die gegenwärtigen Aufgaben einer deutschen Zeitschrift für Soziologie. *Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften, Reihe A: Soziologische Hefte* 1 (1): 5-11. [Neu gedruckt 2017 in KZfSS, 69 (1 Supplement): 75-80.]
- . 1934. Nach zwölf Jahren. *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 12 (3/4): 225-29.
- . 1948a. Die gegenwärtige Situation, soziologisch betrachtet. In *Verhandlungen des Achten Deutschen Soziologentages vom 19. bis 21. September 1946 in Frankfurt am Main. Vorträge und Diskussionen in der Hauptversammlung und in den Sitzungen der Untergruppen*, Hrsg. Deutsche Gesellschaft für Soziologie, 20-40. Tübingen: Mohr.
- . 1948b. Erstes Vorwort. In *Verhandlungen des Achten Deutschen Soziologentages vom 19. bis 21. September 1946 in Frankfurt am Main. Vorträge und Diskussionen in der Hauptversammlung und in den Sitzungen der Untergruppen*, Hrsg. Deutsche Gesellschaft für Soziologie, 1-6. Tübingen: Mohr.
- . 1957. *Erinnerungen*. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . 1959. Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie. Persönliche Eindrücke in den ersten fünfzig Jahren (1909-1959). In *50 Jahre Deutsche Gesellschaft für Soziologie, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 1, Hrsg. König, René, 11-20. Stuttgart: Enke.
- Wöhrle, Patrick. 2015. *Zur Aktualität von Helmut Schelsky. Einleitung in sein Werk*. Wiesbaden: Springer VS.
- Zürcher, Markus. 1995. *Unterbrochene Tradition. Die Anfänge der Soziologie in der Schweiz*. Zürich: Chronos.
- . 2016. Anfänge der Soziologie in der Schweiz. In *Geschichte der deutschsprachigen Soziologie*, Bd. 1, Hrsg. Stephan Moebius und Andrea Ploder. Doi: 10.1007/978-3-658-07998-7_4-1 (Zugegriffen: 01.07.2016).

著者について

シュテファン・メビウス（Stephan Moebius）はグラーツ大学（カール・フランツェンス大学グラーツ）の社会学理論・観念史教授であり、同大学の社会学研究科長を務めている。現在の主な研究テーマは1945年以後のドイツ社会学の歴史であり、近著に『ルネ・ケーニヒと《ケルン学派》——社会学史的アプローチから』（Moebius 2015）、「社会学的観念史の方法論」「西ドイツ社会学初期の学派、アクター、地域の中心地」「1945年以降のドイツ語圏の社会学における社会学の諸論争」（いずれもアンドレア・ブローダーとの共編『ハンドブック・ドイツ語圏の社会学の歴史』第一分冊 [Moebius und Ploder 2017] 所収）がある。

訳者付記

本稿は、Stephan Moebius, 2017, »Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* (KZfSS)«, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69 (1 Supplement) [Sonderheft 56] : 3-44. の全13節中、6節までの翻訳である。分量の制約のため同論文を二つに分割し、7節以下の翻訳（下）は『京都社会学年報』次号に掲載される見込みである。

原論文が収録された『ケルン社会学・社会心理学雑誌』69巻1号別冊（特別号56巻）は、同誌の過去の著名な論文を年代ごとに取り上げて再公刊する企画のもと編まれており、原論文はその特別号に再録された論文を中心に『ケルン雑誌』に関わる社会学の歴史を再構成したものである（原論文に掲載されている、再録された論文の一覧は次稿で紹介する）。その特別号の編者序言には、「本誌を現在刊行しているシュプリングー出版から、2012年に当時の編集発行人であったユルゲン・フリードリヒス、トマス・シュヴィン、ハイケ・ゾルガに対して、1921年から2012年の期間に刊行された論文のなかから最良のものを「ベスト・オブ・『ケルン社会学・社会心理学雑誌』」という意味で1冊の本として公刊したい、との希望が伝えられ」、「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』とその先行誌のなかに現われている……社会学の歴史を知」りうるように、そして「社会学で《古典的(klassisch)》と呼ばれる諸論文にふたたび接近しやすくなるように」企画されたと記されている（Hans-Jürgen Andreß, Daniela Grunow und Thomas Schwinn, 2017, »Editorial«, in: 同上 : 1-2.）。またこの特別号には、本稿の原論文に加えて、主に編集体制の変化から『ケルン雑誌』の変遷について論じているフォルカー・ドライアーの論考（Volker Dreier, 2017, »Die *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*: Zur Genese, Struktur und Entwicklung einer soziologischen Fachzeitschrift«, in: 同上 : 45-59.）も収録されて

いる。社会学の雑誌の成立や発展、変遷を理解するうえでは、本稿や以上の論考と併せて、アンドリュー・アボットによる『アメリカ社会学雑誌』（*American Journal of Sociology, AJS*）の歴史に関する研究（Andrew Abbott, 1999, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, Chicago: University of Chicago Press. [= 2011, 松本康・任雪飛訳『社会学科と社会学——シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社.]）も比較対象として参考になる。加えて、フォン・ヴィーゼとケルン社会科学研究所の活動やヴァイマル期と戦後再建期の西ドイツの社会学について日本語で紹介している文献として、米沢和彦（1991, 『ドイツ社会学史研究』恒星社厚生閣, 特に147-154.）、鈴木幸壽（2000, 「ケルン大学社会科学研究所と社会学——L. v. Wieseを中心に」『和洋女子大学紀要』文系編, 40: 63-82.）、山本鎮雄（1986, 『西ドイツ社会学の研究』恒星社厚生閣.）の各論考なども参照されたい。

訳語に関して、本稿では *Herausgeber* を「編集発行人」（雑誌の発行に携わる編集者）、*Redakteur* を「編集者」（雑誌の発行に携わらない編集者）と訳した。また亀甲括弧〔〕内は訳者による補足である。本文中の文献指示、付録（次稿に収録予定）、参考文献について、文献情報を参考文献内に統一するため訳稿では一部修正・追記している箇所がある。

なお原論文は2018年12月現在オープン・アクセスで公開されており（2017年7月公開、<https://doi.org/10.1007/s11577-017-0433-6>）、翻訳に際して著者と出版社から許可を得ている（©S. Moebius 2017）。訳稿の修正にあたっては、『京都社会学年報』査読委員の田中紀行先生のチェックと助言を受けた。ここに謝して記しておきたい。またこの翻訳は、JSPS 科研費 17J08728 の助成を受けた研究成果の一部である。

（うめむら むぎお・日本学術振興会特別研究員 PD）